

## 浅い湿地のビオトープをつくってみると

～特に鳥類の視点で、宍道湖グリーンパークのビオトープ池を例に～

森 茂晃（ホシザキ野生生物研究所）

今年（2026年）6月に30周年を迎える宍道湖グリーンパークの北側には、開園から7年後に整備した約1.4haの『ビオトープ池』があり、グリーンパークの附属施設として位置づけられている。



上空から撮影したビオトープ池（下の水面はグリーンパーク園内の池）

宍道湖グリーンパークは、ホシザキグリーン財団の環境整備事業において、野鳥観察舎に訪れる「人」が利用する「公園」として、また「野生生物」に生息空間を提供する「ビオトープ」として創出された。その施設拡充として計画し、取得した北側用地は、特にビオトープとしての機能を持たせるため、隣接して宍道湖や水田地帯があるという周辺環境や、園内に既にある環境要素との整合などの諸条件を踏まえ、水鳥あるいは水辺の鳥の利用が見込まれる水位調節が可能な浅い湿地『ビオトープ池』として整備した。

当初の『ビオトープ池』は、用地の面積を広く使った一つの水面からなるものであったが、浅いが故に地下茎で群落を広げるガマやヨシの繁茂の抑制や、広さがあるが故に水位を下げた時に適度な状態を保つことが難しいなど、維持管理面で課題が顕在化してきた。特にガマやヨシの群落が広がっていく状況は、水面の存続が危ぶまれるほどであったため、これらの課題をクリアし、さらにビオトープとしての機能向上として多様性を高めることを目的に、2014年には現在のように3つの水面でそれぞれ水深が異なり、水路状の深みを持たせるよう再整備した。



現状を象徴する種の一つであるコガモ

本報告では、計画から整備、再整備に至るこれまでの経緯から得られた「浅い湿地のビオトープ」の特性や維持管理に関する知見を、開園当初からグリーンパークで実施している鳥類の定期調査のほか、夜間観察やセンサーカメラなどでモニタリングしてきた中で明らかになった現状のビオトープ池を象徴する鳥類と合わせて紹介する。